

平成30年度 第1回岡山県子ども読書活動推進会議 (議事要旨)

平成30年5月21日(月) 13:30~15:30

岡山県庁分庁舎 601会議室

出席者 相賀委員、大村委員、草木原委員、塚本委員、徳山委員、東委員、湯澤委員

欠席者 白神委員、土井委員、藤井委員

1 開 会

2 議事運営等に関する申し合わせ

3 説 明

- (1) 第四次「(国)子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」について
- (2) 第4次岡山県子ども読書活動推進計画策定スケジュールについて

4 協 議

- (1) 第3次岡山県子ども読書活動推進計画の成果と課題について

ア 重点について

(7) 学校等における子どもの読書活動推進

○小・中・高校生の「読書好き」、不読について

- ・学力テストと「読書好き」の資料は、画期的。読書(読書好きや読書の時間)が学力に関係していて大事だということを訴えていくことのできる資料である。
- ・学校に読書の大切さを訴えていくための、重要なデータとなっている。
- ・秋田や青森は、貸出冊数が少ないのに、読書好きが多いのはなぜか。多読が必ずしも読書好きにつながるということではないのかもしれない。
- ・中高生は忙しく、本を読む時間の確保が難しい。何らかの手だてが必要。
- ・中学生の場合、友人同士で勧め合う方法は、読書が広まりやすい。ビブリオバトルは、とても楽しく、取り組みやすい。しかし、やっていない学校も多く、まだまだ普及していく余地がある。
- ・本を読む子・読まない子の2極化が問題
- ・就学前の子どもは、本が大好きである。家で読まない子も園では読んでいる。

○目指す子どもについての確認

- ・自分の興味関心に合わせて本を選ぶことのできる子ども。
- ・目的に応じて読める子、本を選べる子ども。

(イ) 家庭教育への支援及び子どもの読書活動を支える人材の育成・協働

○人材育成・ボランティアについて

a 県立図書館

- ・ボランティアスキルアップ講座を開催(年6回 昨年度250人参加)
- ・館長研修、新任職員研修等、学校司書や司書教諭に対する研修を実施。
- ・県からの講師派遣事業(昨年度4件)

b 市町村立図書館

- ・ボランティア研修会には、幅広い年代の方が参加。年配の方もいる。
- ・ボランティア人口は、ここ数年で増えた。(特に、保護者ボランティア)
- ・クラス数の割にボランティアの人は足りていない。人材育成の必要性
- ・ボランティアの高齢化は課題。

c 保護者・読み聞かせ関係者

- ・読み聞かせに自信がない保護者が多いので、自信がない保護者向けの研修があれば良い。(参観日後の読み聞かせ講座等)
- ・ボランティアが増えると何を讀んだらいいかわからないボランティアも増える。
- ・子どもたちは純粋なので、ボランティアが読む(選ぶ)本によって、良くも悪くも影響を受ける。だからこそ、ボランティアのスキルアップが重要。
- ・ボランティアをする親が増えると、その子どもが、一番変わる(伸びる)。
- ・地方公務員法の改正で、嘱託司書がパートになる可能性が出てきたが、まずは、常任の学校司書を増やすことが大事。人材の確保こそが最優先。

○教師・大人に期待すること

- ・先生は、本を使うのがうまくないように思う。先生が読書好きでないと子どもは読書好きになれない。まず先生が本を使うことが大事。
- ・教員の「読書好き」に関する数値はないのか。
- ・親や先生が読書好きだったら、子どもも読書好きになる。
- ・幼稚園には、専門の人はいない。先生が読書好きになるような研修は大切。
- ・今の自分のニーズに合わなかった本は、無理をして最後まで読まなくても、途中で辞めてもいいということも教えない。
- ・小学生のうちから図書館の利用の仕方、目次の読み方、フェイクニュースについて教えてほしい。
- ・司書教諭と学校司書は、車輪の両輪のようなもの。互いの協力が必要不可欠。
- ・新学習指導要領では、学校図書館の活用が重要視されている。そのためにも先生が、専門の学校司書・司書教諭と協力して学校図書館を利用し、積極的に本を利用することが豊かな授業づくりになる。

(ウ) 県立図書館の機能を生かした子どもの読書活動推進

○子どもが主体となった取組について

- ・高校生の展示コーナーの設置。(昨年度18校)
- ・ビブリオバトル県大会の開催。(県立高校7校、私立高校1校)
- ・中高生の職場体験を実施。

イ 課題(中学生になると「読書好き」が減ること)について

- ・中学校は、教科担任制という特性もある。中学校は忙しく、生徒と関わり、個別にアドバイスする機会も少ない。
- ・中学生になると、図書の時間自体がなくなる。

- ・PTA 活動はあっても、親の足も急に学校から遠のく。
- ・高校生になっても本を読む生徒は、中学生の内に「親と本の会話をしている」「うち読に取り組んでいる」というデータがある。
- ・親から子どもへの読書支援は、直接関わることだと思われがちだが、それだけではない。親が図書館を利用している姿を見せることや、声かけも重要な読書支援となりうる。
- ・秋田県の数値が高いのは、読書条例を策定したことで、本を読む大人が増えたことが関係しているのではないか。
- ・大人が読書する姿を見せることは、効果的。大人が変わらないといけない。
- ・子どもが勧める本を読んでもみることも大事。子どもと同じ本を読むことで、子どもの興味関心をつかむことができる。
- ・だれでも面白い本は、口に出して伝えたい傾向にある。
- ・「子どもが一番興味関心のある人に本を紹介してもらうことが大事」という話を聞いた。
- ・先生が読んだ本を紹介するだけで、子どもが動く。先生の影響力も大きい。

ウ その他

○行政に期待すること

- ・図書館に連れて行ってもらえない家庭もあるが、国や県の施策で、どの子どもも平等に本を読める機会を作っていかなければならない。
- ・都市部では、読書の取組が盛んだ。どの子どもどんな場所でも参加できるよう工夫していくことが大事。どの子にも行き届く読書支援をしてほしい。

○その他

- ・改定版おもしろ読書事典を作らないといけないか。
- ・「読書好き」とは、何をもっての読書なのか。本の読み聞かせを聞いて好きなのか、自分で読んで好きなのかで意味合いが違う。
- ・私自身、読書が好きになったきっかけは、ラジオの朗読を聞くことだった。聞くのが好きで、次第に本を読みたくなった。読み聞かせを聞くことから読書好きになるというパターンもあるのではないか。
- ・教育的格差と経済的な格差がリンクし、それが親から子へ引き継がれる傾向にあることを考えると、その負の連鎖を断ち切るためにも、そういう子には、特に身近で誰でも利用できる学校図書館の活用を積極的に促す必要がある。

(2) 第4次岡山県子ども読書活動推進計画について

事務局説明 質問・意見なし